
Owler

三沢 馬太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Owler

【Nコード】

N9523Q

【作者名】

三沢 馬太郎

【あらすじ】

学生時代の懐かしい思い出が一変して……

ガラス張りのドアを開けると、溢れてきた煙草と香の煙が頬をかすめ、背後のホールへ流れた。

青い照明の下、絞られたBGMに合わせて人々の黒い影が蠢く。憚るような低い声は亡者のさんざめきにも似て、大きな吹き抜けガラス越しのビル群を背景に、彼らの緩慢で繊細な動きは影絵のよう。「うひゃ、なんか、リアルに興奮すんだけど」

勝也はいま擦れ違ったばかりの若いウェ이터の首筋を熱く見つめ、狂躁的に言った。

「先輩、もうちょっと落ち着いてっというか……」そう言いながら、浩太の目はうす暗いフロアの中、沙織の姿を探す。

「浩太、こつちこつち」懐かしい声。浩太の胸が瞬時に熱くなる。カウンターの脇、カクテル・ドレスを着た沙織が立っていた。

「久しぶり」つとめて無愛想な声で応えたつもりではあったが、昔の思い出に緊張する。

瞬間、びゅわり、背後から一羽のフクロウが男二人の間を掠め、沙織の肩に留まった。

「おいおい、これが沙織ちゃんの、フクロウちゃん？」勝也はややしき気味に、奇異の目で彼女とフクロウを見つめた。

沙織は嫣然たる笑みを浮かべ、静かに頷いた。もうすぐ母になる落ち着き。……これだけは、学生時代の彼女になかったもの。

学生の頃付き合っていた沙織が「梟匠」^{ウツクシ}の末裔であると始めて知らされたのは、浩太たちが卒業して五年後、沙織が結婚するという便りを受け取った後だった。

鷹ならぬフクロウ、正確には日本最大種のシマフクロウを用いて山岳での狩猟を行う一族として、梟匠は歴史の裏側で、細々とその活動を営んできた。起源は古く、古の朝鮮からの渡来人の一部が山に居着き、千年以上の永きにわたってその術を守ってきたとさえ言

われているが、夜に狩りを行い、ウサギや、時に小型の鹿さえも仕留めるらしいという荒々しい流儀意外、その慣習について仔細に語られることはない。

沙織も学生の頃は努めて自分の一族のことを口に出すこともなく、知らされた当時、一市井の女性としてしか彼女を見ていなかった浩太たちは、大いに驚いた。

「ところで今日って、沙織ちゃんの『籠り（こもり）請』^{こい}ってことなんだけど、それって、何なのよ？　なんか響きが変じゃね？」

そこへ、妙に痩せた青白い男が、やはり大きなフクロウを肩に乗せて沙織の脇に立った。年の候は浩太と同じ位。

「夫なんだけど」沙織は掌で男を示した。

浩太と勝也は、軽く会釈する。沙織と同じく梟匠一族の人間とだけ聞いている。結婚式も彼の郷里の山里で秘密裏に行われたため、彼女の旦那とはこれが初対面である。

「どうも」旦那の目には精気が無く、代わりにその肩のフクロウの黄色い目の方が、爛々と輝いている。フクロウは無表情に顔を三百度程回転させ、首を傾げた形になった。

「それで、今日はなんでおれたたちが…」浩太がそう言いかけたとき、沙織は「来て」浩太の手を引き、大通りに面した、地上百数十メートルのバルコニーへと連れ出した。

浩太はその手の柔らかさに、十年以上前の彼女への想いが変わらないどころか、灼けつく体のものになっていることを思い知る。

「どう？　いいお店でしょ？」空中庭園のようになっている、風の強いバルコニーの手すりに凭れ、沙織は浩太を振り返った。フクロウが、わさり、飛び立ち、庭園の木の枝に止まる。「今日来ているお客さん、みんなうちの一族の人たちなの。店長もそう」

「へえ…沙織を祝うために、貸切りって訳」そんな中、部外者に等しい自分たち二人が招かれた疑問が解けぬまま、浩太は眼前の超高層ビルの灯りを見つめた。

「今夜は…浩太たち…忙しいのに、本当にごめんなさい」

沙織の切なげな眼差しを受け、浩太はドキリとした。

沙織のフクロウが再び飛び立ち、向かいのビルの屋上アンテナに留まった。月明かりの夜。摩天楼の陰とネオンを背景に、フクロウの影が不気味に浮かび上がっている。

「な、なんだよ。突然」照れ笑いを隠すようにフロア内に目を向け、浩太はカクテルを空けた。「そう言えば、何か月…だっけ？」沙織の腹部を顎で示した。

「まだ…二か月くらいなんだけど」まだ目立たないお腹をさする沙織。ネオンと月明かりに、横顔が艶めかしく映える。「こんな馬鹿げた行事、しなきゃいけないなんてネ…」

浩太は目の隅に、精悍な鼻匠族の青年と、廊下へ歩み去る勝也の嬉々とした背中をとらえた。その青年は、沙織たちのもの以上に巨大なシマフクロウを、肩に乗せている。

勝也の昔からの性癖に呆れつつ、苦笑をするしかない浩太。「まったく…おれがタイプにされてたら、とっくに絶交してたけどね。けど、それを除けば、って言い方は変だけど」浩太と沙織は笑った。真顔に戻り、浩太は言う。「本当にいい先輩。じゃなきゃ、今まで付き合ってた来ないよ」

「そうね…」沙織もまた目に陰を宿し、紅ワインを一口飲んだ。そして、浩太を見つめると、開きかけた口をつぐんだ。

「あのさ…」浩太は言い淀んだ。「もし…」

「もし、おれたち、あの時ずっと続いてれば…。今頃、どうなってたか…？」

ためらっていたその時、ばさり、また頭上を大きな影が掠めた。沙織のものではない、別の巨大なフクロウ。暗がりに判然としないが、フクロウは向かいの高層ビルのアンテナの方面に降り立っていった。月が翳っている。

「『梟』っていう漢字、」唐突に沙織が切り出した。「知ってる？ フクロウの『首』を木の上に晒した形をあらわしたものなんだって、元々。つまり、昔々、大昔の中国ではフクロウは悪の鳥として

扱われていて、よく悪鬼祓いのため、村々の木の上にはりつけにされてたんだって」

ネオンを見つめたまま、冷静にまくしたてる沙織。突然のことに、浩太は次の言葉を継げない。沙織は続ける。

「それでね、私たちの一族の祖先は、日本がまだできたばかりの頃に朝鮮から渡ってきた、って言われてるんだけど、その古代中国での悪習によって積もり積もったフクロウの怨みを鎮めるために、梟匠として組織され、働きつづけてきたんだって……。だから今でも私たちの最高の神様はフクロウだし、狩りをするのも、実はフクロウ、いえ、フクロウの神様を満足させるための」

「それが日本に土着して、今でも脈々と続いてるってこと……？」不可解な面持ちの浩太。

沙織は頷き、また紅ワインを口にする。風が強くなってきた。フクロウが一羽、また一羽と頭上の揺れる枝に集まり、黄色い目を不気味に縦に細め、こちらを見つめている。

「そう言えば勝也先輩、遅いよなあ」時計を一瞥し、すぐ目を上げた浩太は凝然とした。フロア内の、スタッフを含めた他の全員が、いつの間にか蠟燭の灯る中央の大テーブルに寄り集い、浩太たちの方を見つめている。フクロウを肩に乗せている者も大勢いる。

「な、なんだよあれ……！？ いまどき、KKKやフリーメーソンじやあるまいし。怪しすぎ」不安を認めたくなくて、歪んだ笑いを沙織に向ける浩太。「……なっ？」

「儀式の始まり……」沙織の眼が潤んでいる。「嫉妬するの」「ハ？」

「結婚したのはいいんだけど……旦那と私、それぞれ飼っているフクロウが、嫉妬するの。互いの飼い主に」

「なんだよそれ！ そんなこと、ある訳ないじゃない」浩太は叫んでいた。得体の知れない不安が胸奥に滲む。

「そう……。別に本当に嫉妬してる訳じゃない。分かるわ。でも、昔からそうなの。そういう風に決まってるの」

「バカバカしい！　それが決まりだつて言うなら、何てバカバカしい一族なんだ」つい声を荒げる。

「そう…本当に、バカバカしいと思うわ…けど…けど、この儀式をしないと、私、子供が産めないの！」沙織は振り返った。心なしか涙を滲ませる目が細まっているように感じる。「子供が…欲しい…分かるでしょ？　ね？　あなたも私の気持ち…分かるでしょ？」

「あ…あ…」浩太は後ずさった。「それで…おれたちは…何のために…？」

夫がドアを開け、フロアから歩み寄ってきた。「我々の赤子からフクロウの気を逸らすため、『贄』になつてもらいます」

「『二エ』…？生贄つてこと！？」ふと、浩太の頭に、昔動物図鑑で読んだ、百舌の「早にえ」の残忍な図が想起された。「そ…そんな！　この今の世の中で、そんなバカバカしい話つてあつていい訳…！？」

とつさに勝也の安否が気遣われ、浩太は震える指で携帯を鳴らした。流行りのJ・Popの着メロが鳴る。

浩太はその音源に目を凝らす。先ほど飛び去ったフクロウが留まっているはずの向かいのビルの屋上。暗い影になり、フクロウの影が判然としない。

雲が晴れ、一瞬、月が出た。

「あ…あ…」浩太は指を差し、その場にへたり込んだ。「先輩…！」

フクロウと思われていた影。それは、アンテナの上の勝也の首だった。胴はその下に横たわっているらしく、そこからまだ、着信音が聞こえている。

「あなたたちは…『闇』と『？』です」

「『エン』…？　『コン』…？　なんだよ、それ！？」

「元々は古代中国で、『去勢された者』、或いは『宦官』を意味する文字です。我々の一族は、代々性的に不能若しくは倒錯した男たちを、その生贄に供してきました。晒された彼らの首を、われわれ

は『頁^{ケツ}』と呼びます」

「おれは違う！ おれは、勝也先輩のように男好きじゃない！ 現に、沙織と昔付き合ってたで…」そこで浩太は絶句した。

「分かりますでしょう？ あなたたちが選ばれ、本日呼ばれたのも『贄』として適格と判断されたからなのです」目をフクロウのように細める夫。

「おれは…おれは…」浩太は己の両の掌を見つめた。

「もう…言わないで…」泣き崩れる沙織。「でも、知ってしまった以上、どうしようもなかったの。他に、どうしようもないんだもの…！」

「沙織…！」浩太の頭に、十数年前、沙織と付き合っていた頃の記憶が鮮明に甦る。

—あの事件…。

付き合い始めて数カ月後、沙織と初めて肌を合わせた時、浩太は奮い立つことができなかった。そしてその後、何度頑張ってみても沙織との契りを果たすことができず、浩太は自責の念の余り、遂には沙織を突き放すようにし、逃げ出したのだった。

「我々一族の存続のため…子孫は残さなくてはなりません」冷徹に、夫は言い放った。「ご協力を、お願いします」いつの間にか、バルコニーにはフクロウと一族の面々が全員出てきており、浩太を取り囲んでいる。

浩太は走り出した。

すぐにバルコニーのフェンスに突き当たる。眼下は百メートル以上の、ネオンの断崖。

「くそっ！」先ほどから妙な躊躇に惑いながらも、浩太の生存本能は足を激しく廻らせ続ける。背後から、複数の、重い羽音が迫ってきた。

フェンスに片足を掛け、思い切り跳躍した。幸いにもやや低い隣のビルの屋上が数メートル先にあり、浩太はそこに着地する。

しかし夜の空を恣にする生き物たちは、月明かりに白く照える屋

上のタイルに、自分たちの影をはっきり写し出した。

「痛えっ！」立ち上がるうとした浩太は倒れる。足首を骨折している。「やべっ…」

背後を振り向く。

月明かりを背にし、ひときわ大きい影が上空を飛翔してくる。複数のフクロウの影の中からぐんぐん近づいてくるその影…。

「沙織…」その時、浩太の心に、不思議な思いが兆した。

迫り来る、そのメスのフクロウの“領袖”の黄色い両目が、母になる淡い期待と、深い悲しみの両方で濡れていた。

「そうか…」浩太の心に諦めが宿る。不思議と恐怖は無い。「わかったよ」

―初めから、こうしてれば良かったんだ…。馬鹿だな。本当に男らしくなかった。お前のために犠牲になるか、それとも逃げ切るか…もつと早く結論を出してれば、こんな無様な格好、見られなくて済んだのに。ハハ、格好悪い…。

爪が迫る。ビルの谷間、月明かりの中、浩太は呟いた。

「幸せにな…」

（後書き）

2007年11月1日に書いた作品です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9523q/>

Owler

2011年2月15日22時10分発行